

平成21年度大学院教育改革支援プログラム  
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」  
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

・自主企画の内容

(1) 企画の名称

「シルクロードのひとびと part4 みる, きく, まなぶ 沙漠の文化」

(2) 開催日時・会場

2009年7月11日(土) 13:00~17:00 大学会館 大集会室

(3) 講演者

杉山 徳太郎(〔株〕スガハラ 代表取締役)

アブドシュクル・アブドラフマン(金沢大学 文学部 博士研究員)

アブドセミ・アブドラフマン(東京芸術大学 音楽学部 教育研究助手)

鷺尾 惟子(奈良女子大学大学院 人間文化研究科博士後期課程)

(4) 企画者

古澤 文(人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻社会・地域学コース)

鷺尾惟子( " )

ライラ ママティ( " ・共生社会生活コース)

(5) 支援教員 相馬 秀廣(文学部教授)

(6) 参加人数

62名(内訳:[学内]教職員3名,大学院生5名,学部学生・研究生0名,[学外]46名)

(7) 自主企画概要

本セミナーでは中国西北部に位置する新疆ウイグル自治区に生きるひとびとのくらしをテーマとして、多角的な視点から理解することを目的としている。特に今回は暮らしの中で織りなされる有形無形の文化に着目していく。当地域を取り巻く自然環境の中で生まれ、そして連綿と引き継がれてきた文化には、人々の思いや暮らしが反映されている。現代化の波が訪れる中、様々な影響を受けて変容する文化、一方では伝統文化の保護、またこれまであまり着目されてこなか

ったローカルな文化の掘り起こしなど，文化を取り巻く状況は大きく動きだしている．こうした状況を当地域の暮らしに欠かすことができない絨毯，そして音楽を通してみていく．

．実施報告

セミナー内容

## 1． ホータン絨毯の変遷について—清朝第六代皇帝乾隆帝から新中国成立まで—

杉山徳太郎（〔株〕スガハラ 代表取締役）



ホータン絨毯の歴史は非常に長いのだが，今回は表題にある期間を取り上げてみていく．

絨毯とはあくまでもパイルのある織物で，平織り，つづれ織りは絨毯と言わない．絨毯は縦糸に結んで構成されており，結び方はペルシャ結び，トルコ結び，チベタンノット等様々ある．パイルに使っているのはほとんどがウールで，縦糸と横糸は新疆の場合，綿が取れるので綿を使うが，綿が取れない所

では獣毛を使う．ただし，獣毛の場合弱く，穴が開き易い．現在，染料はアニリン染料などの化学染料を使用しており 100 年以上前にホータンに入ってきた．天然染料の藍と比べて退色，変色しやすく，そこである程度時代をみることができる．

絨毯は絨毯片（フラグメント）あるいは完全な形で楼蘭、<sup>ニヤ</sup> 尼雅、<sup>サンフラ</sup> 山普拉遺跡から発掘されている．さまざまな文様があり，たとえば，山普拉遺跡では漢代（1～3 世紀）のものが発見されている．また現在の故宮博物館には乾隆帝以降の皇帝が使用したシルクの絨毯が残っている．他にもメトロポリタン美術館には 200 年前のザクロ文様の絨毯がある．清朝になり 1884 年に新疆省がおかれた．その時記された新疆図志 実業編 に絨毯が登場しており，ホータンから英領インド，ロシア等へ輸出した記録が残っている．その後，1949 年新中国の成立，1951 年にはホータンに国营絨毯工場ができる．絨毯工場はホータンのみならず，新疆各地に作られるが現在そのほとんどが倒産しているという．

ホータン絨毯を見ていく上でカレキン・モルドヴァック氏の活躍を見逃すわけにはいかない．ルコックの探検記によれば「ホータン絨毯は衰退」とあるが，カレキン氏がトルコのアダナで起こったアルメニア人の大虐殺で家族と生き別れになり 1909 年ホータンへやってきて絨毯工場を設立し，また現在でも一番人気のある彼の考案した文様「ケルキュン・ヌスカ」によって，ホータン絨毯は存亡の危機から救われた．ただカレキン氏の活躍はまだ当地であまり評価されておらず、非常に残念である．

当時ホータン絨毯に目をとめたのは探検家でなく，カシュガルにおかれた英国領事夫人や娘な

ど女性たちであった。彼女たちは植物染料で染められたホータン絨毯は柔らかく良いと紹介している。

軍閥が割拠する民国期、回族の馬仲英は新疆省ウルムチ攻略を目指すものの、反撃にあいソ連へ亡命する。その敗残兵をホータンに率いたのが馬虎山で、1934年から4年間ホータンを占拠する。その時に織らせたのが「和真（ホータン）記念」と記された絨毯である。英国の専門書には17枚しかない貴重なものとあるが、実際には何千枚も生産され、自分の兵隊や蒋介石にも献上されたという。

ホータン絨毯の代表的な文様はアナル・グリ・ヌスカ（柘榴文様）、チャチマ・ヌスカ（散花文様）、ロンカ・ヌスカ（花瓶文様）、エディアル・パットヌス・ヌスカ（毛布の柄とお盆文様）、ケルキュン・ヌスカなどが上げられる。たとえばロンカ・ヌスカ（花瓶文様）に描かれる花瓶とテーブルをそれぞれ中国語の発音に直すと花瓶 = ping, テーブル = an でこれは平安 = ping an と同じ発音になることから、この文様は漢族の影響を受けていると考えられる。またウイグル族は花が好きで絨毯には散花文様（チャチマ・ヌスカ）も多い。

ホータンの絨毯工場が潰れたといったが、ニュースによるとトルコの財閥によってホータンに工場が新たに作られたという。つまりトルコで売られているのはホータン製となる。またシルクはホータン産ではなく、安価な南米より輸入しているという。現在の絨毯は国籍不明になってきているといえる。しかしアンティークのものは現地で生産されたもので、間違いはない。

最後に、日本の博物館で絨毯がみられるのは国立民族博物館、白鶴美術館、遠山記念館等がある。絨毯は買うよりもまず見ること。見ていくうちにわかるのでそれから買うことをお勧めする。

（文責：古澤 文）

## 2. ウイグル音楽における音程変化の移行パターン

アブドシュクル・アブドラフマン（金沢大学文学部博士研究員）

イギリスの民族音楽学者アレクサンダー・ジェー・エリス（Alexander J. Ellis, 1814 ~ 1890）は実証的な民族音楽研究を行うために、鍵盤一つ一つの音に数字を付けてその数字と各民族の音楽がどれくらい異なるのか、音叉という記号を使い、音階の音高を測定し比較した。しかしドイツのクルト・ザックス（Curt Sachs, 1881~1958）は音叉で聞いて調節を行うと人の意識的な部分が入り確実ではないと批判し、機械を用いて音の振動を心電図のように紙に写して音楽を測定し検証した。



しかしこれにも問題がある。なぜならば、ここでいう音の振動とは、1秒間にどれだけの振動

ができるのかという周波数を数値で表しているのだが、音楽というのは1秒間で音の高さが動く場合もある。特に伝統音楽の場合1秒間に動く音が、その伝統音楽の特徴を表していることがある。そこでその1秒以内の音測定するため、以下のような方法を用いて検証を行った。まず、UA-3FX (Rolad社) という機器を用いて音声をPCに入力し、Sound it 3.0LE (インターネット社) というソフトで再生を行った。このソフトは曲のある部分だけ選択して聞くことが可能である。つまり検証箇所を選び、再生し分析することができる。エリスやザックスの時代にはこうした細かいところまで選択することが不可能だったが、現在ではパソコンを用いて細かな測定が可能となった。次に音程測定ソフトを用いて楽譜を作成した。そしてその周波数がどのように動いているのか、音はどのくらいの振動で動いているのか、1曲ずつ測定して、分析を行った。ただし同じ音でも周波数は、たとえば0という音はピアノならば同じ音の周波数が出るが、伝統音楽



の場合、その0があるときは周波数が低かったり、上がったたりする。それを検証しなければ、その音楽の特徴を理解することはできない。それを細かく分析する必要があり、今後の課題となっている。

次に金沢大学文学部の林氏開発による W-Energy というソフトに音楽を MIDI ファイルで取り込むと、音程がどのくらいあるのか、その量をグラフ化することができる。本研究ではウイグルの特徴的な7つの地域の音楽の検証を行った。この結果から、ウイグルの音楽は単三度から完全一度の間に音が集中していることが分かった。また、ウイグル音楽の時代による比較を行った。80年代のウイグル人作曲者の曲のほとんどが長三度と完全一度との間で使われている音が多く、伝統音楽の特徴とそれほど大きな変化は見られなかった。

各民族の音楽の特徴についてどこが違うのかなど区別するためにこのような移動パターンを比較する方法は有効でないかと考える。また時代の流れを比較することもできる。

今後はさらに他の研究者の意見を聞き改善をはかり、こうした測定方法、研究方法を民族音楽学の中で有用な手法となることを期待している。

(文責：古澤 文)

### 3. ウイグルの音楽文化におけるドーラン・ムカームの研究 その伝承状況の相違について

アブドセミ・アブドラフマン (東京芸術大学 音楽学部 教育研究助手)

本発表では、ドーラン・ムカームのレパートリーと音楽様式を明らかにしたうえで、それらが他地方とどのように影響を与え合いながら発展し伝承されてきたのかを考察する。

ドーラン・ムカームは新疆ウイグル自治区のメケット(Mäkit)県、アワット(Awat)県、マラリベシ(Maralbixi)県などに伝承されている。

ドーラン・ムカームは一般的に五つの歌から構成されている。それらは演唱される順番にムケッディメ、チケトメ 3/4、セネム 4/4、セリケ 2/4、セリリマ 5/8、2/4 である。この中でセネムは即興的な部分ネフィレティを伴う場合が多い。ムケッディメは全てのムカームにある。首席歌手（一人）が独奏楽器ダブ或はカルンを演奏しながら、短い四行詩のコシャク（即興的に応酬される 4 行詩）が歌われる。使用楽器はナグマダブ、ドーラン・ギジャク、ドーラン・ラワーブ、カルンである。ムケッディメを除いて、全曲を通して踊りがつけられる。ムケッディメの後に有拍のリズムが始まり、カルンやドーラン・ギジャクと共に演奏者全員で歌われ、最後にセリリマで終了する。一つのムカームの演奏時間は 8 分程度である。



また、ドーラン・ムカームを構成する詩の韻律法は多様であるが、それぞれの詩においては一つの法則が厳格に守られている。コシャク一般の代表的な韻律法はトゥタシ・カピエ *tutash qapiyä*（全行揃いの韻 AA 或いは AAAA）、ジュブ・カピエ *jup qapiyä*（二行ずつの韻 AABB）、アルマシュ・カピエ *almash qapiyä*（交差の韻 ABAB）、ウシュ・カピエ *üsh qapiyä*（三行揃いの韻 AABA）、アラカピエ *ara qapiyä*（部分揃いの韻 ABCB）があげられるが、ドーラン・ムカームに用いられるのはこのうちの AABA と ABCB が最も多い。

しかし、メケット県のドーラン・ムカームのレパートリーの特徴は古くから伝承されてきたコシャク以外にも新しいコシャクがレパートリーに組み込まれている。また演唱者が即興によって、場を盛り上げる能力を持っている点でも他の県と比べ際立っている。

一方、マラリベシドーラン・ムカームとアワットのドーラン・ムカームの音階構造から見ると、多くの曲はメケットドーラン・ムカームと近似していることが分かった。いいかえればメケットのものが原型に近く、他の 2 つはそれらの簡略型ともいえる。しかし、曲が同じでも、曲名は異なることもある。また、ムカームに採り入れた歌詞も各地方によって、その相違はしばしば見られる。さらに曲の長さや楽器調弦法の違いなども見られる。これ以外に、十二ムカームのチョン・ナグマ部分の中に、ドーラン・ムカームの素材が見られることは一つの特徴である。

十二ムカームは十六世紀のスルタン・アブドリシット・ハンの時代から体系化された組曲である。ドーラン・ムカームは、ウイグルで最も古い歴史を持つものと考えられる。お互いにどんな影響をあたえたか、そのレパートリーや音楽様式について深く研究の必要があると考えられる。

本発表では、ドーラン・ムカームの分析した楽譜と歌詞を例に取り上げ、その楽団の編成、楽器の構造、リズムの変化について、典型的なパターンをいくつか抽出して論じる。

（文責：アブドセミ・アブドラフマン）

#### 4. 「民間歌曲『アトシュンガ・バルゴンチェ』に見られる変容

鷲尾惟子（奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士後期課程2年）

近年この地域の中で、さらにローカルな民間歌曲が掘り起こされ、次から次へ様々な地域の代表的なものが出てきている。またそれによって、出身地同士で地域のローカルなアイデンティティのようなものが芽生え始めている。

BRAILOIU(1931)によると民謡は口から口へ伝えていくためヴァリエーション(変形)するため、どれが原型でどれが正しいというのではなく、変わっていくことが民謡自身の面白さであるとのべている。また、周(1999)によると変形には、「異歌詞・同旋律型」(歌詞が異なるがメロディーは同じ)と「同歌詞・異旋律型」(歌詞が同じでメロディーが異なる)の二種類があるという。

ある地域の民間歌曲がウイグル社会の中でポップス化され、流行曲として流布していく。つまり地域の内側の方向にいく動きがある一方、観光客や外国へ、また中国語への変換、近隣中央アジアへの広がり、つまり外向けの方向がみられる。こうした外向け、内向けの形があり、地域によってこの方向性が変わっていることに注目する。たとえばドラン・ムカームの叫ぶような歌い方や決まった踊り方のパターンはウイグルの中でも特徴的で、海外講演やガイドブックへの掲載など外向きの発信をしている。一方、ホータンの場合、単調でメロディーに起伏がなくこれまであまり注目されてこなかったが、最近ホータンのコシャック(かたり)集や民間歌曲がポピュラー化され急激に増えている。

アトシュの場合はホータンやドランよりも以前から民間歌曲に関してはメジャーで前から知られており、内外の方向性というわけではないが、「アトシュンガ・バルゴンチェ」という曲だけは様々な方向を向いている。ではその歌がどのように歌われてきているのかを実際に歌ってもらいヴァリエーションを主体に検証を行った。選定理由は、ウイグル人の中で幅広い年代で知られているポピュラーな曲で、1~3番全ての歌詞を全歌いきるのは難しいが、メロディーは大体知られている。インフォーマントは一般人で70~80人、世代も様々、地域も様々、プロではなくとにかく一般の方がどれくらい知っているかに焦点をあてた。すると以下のようなヴァリエーションがみられた。まず、メロディーのある部分がホータン農村部では音程が単調なまま歌われた。これは偶然ではなく特に20~30代では上がらずに歌っており、自分たちはこう習ったという。一方、地元のアトシュでは該当部分の音程が上がっており、CDで一般に販売されているメロディーはアトシュと同様に該当部分が上がっていた。さらにカシュガルの場合はメロディーは同じであるが歌詞の変更がみられた。つまりカシュガルとアトシュでは歌詞のヴァリエーション、ホータンの場合はメロディーのヴァリエーションがみられる。



50年代に様々な地域の民間歌曲が発掘され、歌舞団などによってプロ化され、どんな地域でどんな歌があるということをウイグル人たちが認識し、その中でアトシュの歌も知られていたのではないかと考える。

さらに90年代になると、隣国カザフスタンの歌手、ムラット・ナスィロフがこのアトシュの歌詞を使った歌謡曲を歌いとても流行しロシアまで広がった。ただしこのムラット版の歌い出しはアトシュで歌われているものと異なっている。ムラット版が流行した後、北新疆のイリでアトシュを歌ってもらおうと、歌い出しはムラット版で、途中からアトシュ版に戻っていく。ここでは歌謡曲としてポピュラー化されたメロディーと原曲が混在しており、こうした若者たちが多く出てきたという状況が地域によってあることが分かった。

歌詞やメロディーの違い、地域の違いというヴァリエーションはかなりある。現在リアルタイムでヴァリエーションが変わっていき、この先この歌がどう変わるのか、どういう要素がエッセンスとして残っていくのか、その行く末を見守りたい。

(文責：古澤 文)

## 5. 総括

今回は文化に焦点を当てて企画を行った。発表者4名のうち3名が当地の音楽に関する内容となった。アブドシュクル氏はウイグル音楽の特徴をコンピューターを使って解析し数値化を行い、アブドセミ氏は伝統音楽であるムカーム研究、鷲尾氏は民間歌曲と各々、同じ音楽でも異なる視点をもって扱っており、幅広く理解することができた。また、長年当地と日本を往来し、絨毯に関して造詣の深い杉山氏からは文様から読み取る歴史やその意味、ホータン絨毯の現況など詳しく解説していただいた。絨毯一枚から様々な歴史や意味が読み解かれていく様は非常に興味深かった。



質疑応答では専門分野に携わる方から特にシュクル氏の解析方法への関心が高く、質問が集中した。セミナー参加者のほとんどは研究者というよりは一般の方が多く、なかなか理解されにくい内容であったものの、だからこそこういった場が



自らの研究を外へ発信していく機会になればと考える。会場には杉山氏の貴重なコレクションを東京から運んでいただき展示を行った。発表の合間に杉山氏の解説を聞く参加者の方々もいらっしまった。前日から会場設営に協力して下さい、会場に華を添えて下さった杉山氏に深く感謝を表したい。また、

発表最後に行ったセミ氏と鷲尾氏による演奏には鳥肌がたった。本物を目の前にする迫力はなにものにも代え難く、非常に貴重な経験をさせていただいた。

回を重ねるたびに、参加者の方々が増え、今回は学内外合わせて62名の方々にご参加頂いた。学内だけではなく、外部への広報活動を積極的に行ったということもあるが、開始当初から毎年足を運んで下さる方、友人知人から紹介され、新たに参加して下さった方もたくさんいらっしゃった。当地に興味を持って下さる方がこんなに多いことを非常にうれしく思う。

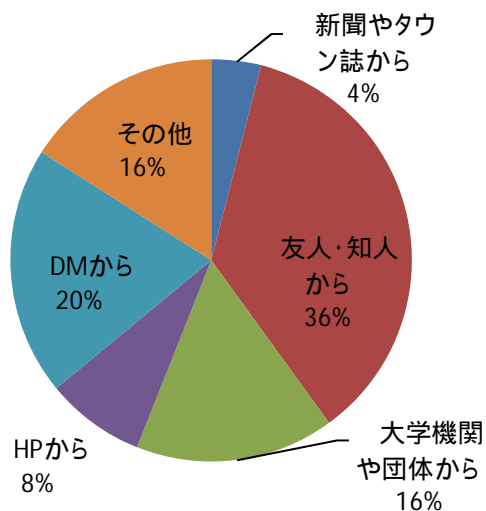
今回、急に司会のピンチヒッターをお願いしたにも関わらず、快く引き受けてくださった甲南大学名誉教授の堀先生に深く御礼申し上げます。いつも貴重なアドバイスをして下さり、また非常に御忙しい中参加して下さった相馬先生、そして研究室の院生の皆さま、ご協力していただいた全ての皆さまに感謝申し上げます。

(文責：古澤 文)

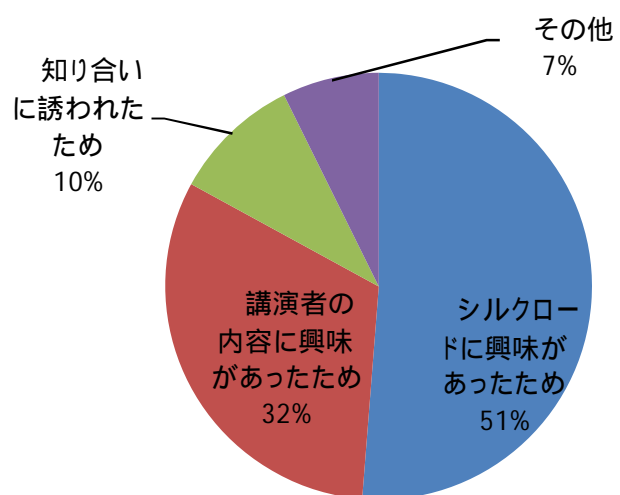
資料：アンケート結果

アンケート結果(回答数=24(複数回答あり))

1. このセミナーをどこでしりましたか？



2. このセミナーのどこに興味がありましたか？



3. シルクロードのどのような分野にご興味ありますか？

\*生活文化全般 \*交流史(ギリシャ・ローマ) \*海のシルクロード \*奈良との繋がり \*音楽, 歴史など文化全般 \*シルクロードの文化並びに佛教伝来 \*東西交流 \*文化の変化していく過程 \*「子育て」と家族・地域社会 \*音楽を通して見た民族の独自性と異民族と融合 \*昔から伝えられてきた歴史, 文化における人々の生きざまとその生活から生まれたものが, 現在まで伝承されている事 \*音楽(楽器), 織物(染色, 織機など) \*ウイグルの仏教と音楽 \*歴史および遺跡 \*人々の暮らしにまつわる話 \*ウイグルの社会と文化 \*ウイグル人の暮らし(過去, 現在, 未来), 等々